

‘ό κόσμος, ἀλλοίωσις· ό βίος, ὑπόληψις.’

46号 1992.4.14

文・編集・発行
恋 怪子

HANDBILLS:

宣戦布告

警備員に告ぐ! 甘ったれ現実の中で砂糖漬けになっている私達へ!!!

警備員はイライナ! 結論から言います。警備員はいらない。私がこんな事を言うのは、特に警備員の職を奪うためじゃない。警備員の恨みを買うためでもない。かと言って、奇抜なことをして騒ぎを起こすためでもない。私の言うことをちゃんと聞いてくれ。そして考えてほしい。お嬢なんかじゃない。宣戦布告なのだ。

—1992年3月17日。私は電撃で行われたブルーハーツのライブへ行った。この日まで私は、警備員に怒りを抱いたことはなかった。いや、むしろ好意だった。と言うのも私の周りでは、警備員について深く考える事もなく、だらかが「いらない」というのでその意見に賛成するという人が多くいたからだ。私はそんな人のことを密かにズレとと思っていた。そしてそんな言わふをし、目の敵にされている警備員を気の毒だと、とも思っていた。彼らだって、好きでやっているのではないんだ。ライブで物を投げたりステージに駆け寄ったりする方が悪いんだ。そう思っていた。そして私はなるべくライブで他人に迷惑をかけないようにし、警備員が境外に入って不快な思いをしない。我慢した。それが、今までやってきた自分達ファンの無責任な行動に対する悔いだと思ったのだ。ところが、この日に見た警備員は私のそんな甘ったれな感情をブチ壊した。彼のした事はあまりにヒドかった。何をしたかと言えば、「持ち物の検査」である。その日もブルーハーツのライブは終立ち等にしかった。少なくとも私の目の前にいたファンは、ほとんど立っていた。そして一心にステージを見つめのめ込んでいる。会場に設置されているイスの上に、ひとひとひとつチックしてしまった。そのサンガラスをかけた警備員は、それらの荷物をひとつひとつチェックを見た。おおかた、ライブ終音の現場を押さえようともしたのだろ。情けない奴だ。端端に荷物を置きっぱなしにして誰もさわらないようなこの国で、本人に気づかれないようにコソッと、自分のものでもない荷物をチェックする奴がいる。彼はそんな権利を一体どこで手に入れたのだろう。警備員だったなら何をしてもいいのか規制するためならどんなことも許されるのか。答は全部の心の中にあはるはずだ。私は自分の答えと違う答を否定したりしない。いや、しなくていい。自分で考えて自分の答えをみつけることは自由だ。「自由を奪う警備員」のようなマネは、死んだってしなくない。私は警備員に見せつけてやるべきだ。自分達で完全な楽しいライブができるということを、お前らなんかうちは知らないだ。那魔なだけだ、いるだけ無駄だ、サッサと帰ってサッサと寝らまえソッタレ!! そう言うべきだ。ただそれに私は迷走が、ライブに於ける自分の存在に責任を持たなければいけない。何もしないで状況が良くなる。思つたら大間違だ。「いかつきっと良くなるや」なんてコトハ聞き飽きた。いつまでたまらわなからんじゃないか!! 私達から変わるという保証なんてどこにもないじゃないか!! 私達から変わつていいこう。見る目的のない警備員に、無理矢理にでも見せつけてやるんだ。私達だってバカじゃない。こんな生ぬるいスタート地点にとどまってるのにはいい加減にしよう。

私達にとって、ライブってなんだ?? 警備員のいないライブを私は体験したことがない。それがどんなに素晴らしいものであるか、今のライブがどんなに悲しいものであるか、私は判っていないのかもしれない。だがひとつだけ言えることがある。私はライブを楽しむだけだ。誰も私の邪魔をしないでくれ。警備員という名の下に私の自由を奪うのはやめてくれ。金払って警備員に会いに来てるんじゃないんだ。シラケるライブはもうゴメンだ。ライブのキマリなんて誰がつくったんだ言ってみろ!! 自分で最低限のモラルも持くれない奴、自分のしたことに無責任な奴、何がブルーハーツを拉致しているのかわかっていない奴、考えたこともない奴。警備員を呼ぶのは誰だと思う?

もう甘ったれるのはやめようぜ。警備員なんて欲しくないんだ。

私の言葉がちょっとでも心をかすったら、意見を聞かせて下さい
宛先はミニコミ案内コーナーに載ってます
(2300713 水山祐芳)

THE FUTURE IS IN ★ OUR HANDS!! No.0

TOO MUCH PAIN についてみんなに考えてもらいたいです。HIGH KICK TOUR 今年の3ヶ月のLIVE全ての場所で、曲の中から手拍子が盛りました。相模大野を強城でゼロットに手拍子で、輪郭が飛んでほしい。という感想をいただきましたが手拍子は止めません。そこで25日の附加ではゼロットは歌っている時、音を大きくしたり小さくしたりしてみんなに自分の気持ちを伝えようとしていました。LIVEに行き、私は歌たり歌じたりとても気持ちが貴重でした。手拍子をしていたために金額から見ればほんの少しの人数の様ですが、私はその人達がどういう気持ちで手拍子をしていたのかわかりません。LIVEには4ヶ月と自分で自分がわからなくなる位で3ヶ月が上がり、自分が止められなくなる事、できるけれど、TOO MUCH PAINではそういう気持ちで手拍子をしているときに見えない。TOO MUCH PAINでは歌が食い食いで歌われる方が多いです。歌を歌うのが好きみたい。でも手拍子をするのは自由だし、私は「手拍子なんてしていい」という権利はありません。手拍子をするのを手拍子しないのもその人の自由だと使う。けれどもゼロットの気持ちが全てはわからないけどゼロットのLIVEを見ている限りではきっと歌がしてほしいと歌って見たいんだ。私は手拍子はその人の自由だと使うけど、その手拍子でゼロットの声が聞こえなくなるのはとても苦痛だ。25日ゼロットの気持ちがどちらかと見ると、とても苦しくなります。私はね手拍子をするなどとは言えないけれど、これを読んでくれる人は自分自身で少しでも考えてみて下さい。LIVEはあたたかの東在LIVEであり、やんわり東はLIVEであります。LIVEはやっぱりみんなで歌いたい歌を歌いたい歌を歌うんだと見ています。ゼロットが歌ってマーシーがいてヨコちゃんがいて、私がいておたかがいて、みんながいて初めてブルーハーツのLIVEだと見ています。

LIVEは25日のLIVEは想しかった見い出しあないんだ。
他の曲はすぐ歌しかねばはずなのにTOO MUCH PAINの歌しか覚えてない。
二つあるのって嬉しい。

TOO MUCH PAINの曲でLIVEそのものが楽しくなくて、てしまつた。
ゼロットがどう感じていたかわからぬけど。
手拍子してた人は「サイコーカーライフだった」と思ってろのかな?
この門脇は半分で居たよ。どうしておわがいします。

永山さんは「警備員に告ぐ!」と書いているけれども、問題は警備員にあるのではなくて、警備のことを世人にさせているアーティストにある。永山さんがブルーハーツのライブで実際に目にしたといき観客の持ち物を無断でチェックするような警備員を入れてライブをやっているアーティストにある。つまりを守ること生きがいのふうにしている人間はどこにでもいるし、つまりだけで「他人を裁く人間はどこにでもいる。そして、観客の持ち物を一つ一つチェックすることに使命感を大然やすバカな警備員はどのライブにもいる。アーティストが警備のことを世人にさせている限り、そういう警備員はなくならない。観客の持ち物を無断でチェックして、ライブの楽しみを台無しにするような警備員を入れてライブをやっているアーティストには「NO!」をいわなければならない。自分たちの演奏が観客に伝わるのを妨げるのに無関心でいるのはおかしい。永山さんは「甘ったれ現実の中で石けん糖漬けになっている私達」と書いているけれど、アーティストも「甘ったれ現実の中で石けん糖漬けになっている」

1987年5月1日。大阪バーボンハウスのブルーハーツのライブで配られたアンケート用紙に「警備についてどう思いますか」という質問項目があって、私はロックンロールのライブに行くよくなつてはじめてライブ会場には警備員がいるということを矢口、背広にネクタイで腕組みをし、ステージに背を向けて立っている人たちがとても異様に思えたことや、長瀬剛のライブで、退場する長瀬剛を7,8人の屈強な男たちがビリカこんでいるのを見て、警備員はアーティストを守るためにいるらしいと思ったなどを書いてアンケートに答えた。この年はラフン、ノーズのライブで事故が起ったせいで、とりわけ警備が厳しくなっていた。そんななかでの6月5日。大官フリースのブルーハーツのライブで、はじまってすぐに観客が前におしゃせてライブが中止された。ヒロトは「前に来たい奴の気持ちちはよくわかる。だけどいつもことをきいてくれや」「オレラガは、きりしないのが悪いんじゅ」と泣き言のふうなことをいった。そのすぐ前の4月21,22日。豊島公会堂のライブでヒロトは警備員のいるという状況の中で、「どう動くかは自由です」といったけど、大官フリースでのブルーハーツはとても不自由になっていた。ブルーハーツをきに来ている観客、ブルーハーツを支えているはずの観客がブルーハーツの自由をせがいでいる、と思った。

このビックのブルーハーツは、ライブの前に警備員との話し合いをしているときいた。そして、きっと少しき努力をつづけたからだと思つけど、この年の12月22,23,24日の横浜西公会堂では鉄木柵をしながらライブをやつたし、最終日24日のアンコールではロープもはずした。3日間とも前におしゃせたりかけまわつたりする観客はいなくて、あたたかいふじい氣で楽しいライブだった。警備をゆるくしてもちゃんとライブができる。それをブルーハーツと観客として証明した。

今年の1月8日。市川市文化会館のブルーハーツのライブを行つたヒロトに、会場の外でもらったチラシ「THE FUTURE IS IN OUR HANDS」に「TOO MUCH PAIN」のときに手拍子をする観客について書いてあった。

1989年5月29,30,31日。代々木競技場のブルーハーツのライブで「TOO MUCH PAIN」をヒロトとマーシーの2人でやつたときもやっぱり手拍子がおこった。だけど途中からそれがなくなくて、みんなシンとして「TOO MUCH PAIN」にききいった。ヒロトが「手拍子をするな」といたわけでもなく、「シーッ!」というジェスチャーをしたわけでもなかった。演奏の力だけで手拍子をやめさせたのだ。演奏する側がそれだけの力を出せば、まく側にそれがヒドく。音楽を通して伝わるものがある。

このビックの「びあ」のインタビューでヒロトはこういっている。「表現のパワーは果てしないよ。うまい、へたじやねえ。楽譜を演奏しじるんじやねえんだから。完成されたショウなんて興味味ない。俺達が楽しめるか、歌が伝わるか、だから観る側もせずなうに受けとめればええのに、何かしらべられると。気分よく解放されるものだううに。R&Rのライブって」たしかにライブが良かろうと悪かろうと、この歌のときはこういうふうに、この曲のこの部分ではこういうふうに、とみんな同じにとびはねたり、ふぶしをあげたり、唄ったり、手拍子をする。ヒロトは自由じゃない。何かにしばられている。だけど、そういうふうにしばられている観客を気分よく解放できるのは音楽の力。音楽を通してこそ、やる側もまく側も解放され自由になれる。

「THE FUTURE IS IN OUR HANDS」に「ヒロトがいてマーシーがいて河ちゃんがいて梶くんがいて、私がいてあたたかいで、みんながいて初めてブルーハーツのLIVEだと思う」と書いてあるけど、それと同じ意味のことを代々木競技場のライブでヒロトはこういった。「オレラガステージにいて、みんながきに来っていて、その瞬間にしかブルーハーツは存在せんのじゃないか」と思つ。

その瞬間といふのは、与えられるものではなくて、やる側もまく側も自分たちの意志で獲得するもの。

北川奈々経会さんが「ブルーハーツと犯罪者」という本を作つて、それに私が9号(1990.3.29発行)で警備のことについて書いた文を載せてくれた。それでそれを読んで、永山祐芳さんが手紙と「宣戦布告」のチラシを送ってくれた。

「THE FUTURE IS IN OUR HANDS」は上林彩さんのが書かれて配ったチラシ。裏にも書いてあって「もう自分をかわいそがせたり、被害者のつもりでいたりはしたくない!! いつも笑っていたいよ。一度しかない今を大切にした!! ブルーハーツにはすぐ感謝していい。ブルーハーツのおかげで自分で何かをしなくちゃって思うようになった。本当の所、今、自分で何をどうすればいいのかわからん!! けど誰にでも『今しか僕にしかできないコトがある』って信じてろから」とあった。

THANKS TO: 北川奈々経会さん、永山祐芳さん、上林彩さん。